

ずいそう

福岡の風を感じて

黨 丈夫



私が福岡に赴任し、3度目の春が訪れようとしています。朝夕の通勤途中、河畔沿いの頬をかすめる風にも温もりを感じずる今日この頃です。私はこの季節、ふと、吹く風に敏感になっている自分に気付くのです。

風は季節の気圧の変化や毎日の天気によって、強さや方向が変わります。また、1日の中でも朝と夕、昼と夜で、はたまた時間帯で、分単位で、突詰めれば一瞬一瞬に変化している事は周知の事です。更に、風は寒い、暖かい、涼しいという温度を体感させてくれます。これには、ヒューヒューとかポカポカとかサワサワとか擬似音を伴って、身近に感じられます。風は潮の香りや花の香、新緑の香りを包み込んで、私たちに季節の移ろいを感じさせます。時には花粉やこう砂等、招かざる微粉を飛散し、悩ましい症状を拡散していますが…。風は生きる者、特に私達人間の五感を刺激し、「生きてる感覚」を気付かせてくれます。殊に日本人は風を使って、変化・動きを伴う人や物の表現で「風韻（おもむき）」「風雅（風流で上品）」「風格（人格）」等、風は古今を問わず私達の生活や文化の中に密接に関わっているのです。

話を福岡に戻しましょう。私にとって、福岡は色々な風を感じられる場所です。山海の自然界に吹く風もありますが、古くから中国大陸、朝鮮半島、東アジアとの接点、九州北部の博多湾岸辺りから西の都、太宰府政庁一帯にかけての遺跡にまつわり吹いている古代の風。私が太宰府政庁の史跡を訪れ、その広大な敷地の中で、礎石に手の平を重ね昔の人々に思いをはせた時、筑紫野の山々を通う風は、優しく頭を撫でてくれました。それから、2度の蒙古襲来の危機に築かれた防塁（石垣跡）と海岸沿いの松林では、国難に身を捧げ散って行った鎌倉武士の思いと、襲われ落命した民衆の怨念に、神風（台風）で沈没、遭難した蒙古軍の将兵を葬った蒙古塚では、異国の地に果てねばならない蒙古将兵の憤りと無念に、鎮魂の風吹き慰めんと、祈らずにはいられませんでした。

私は以前から九州人は人情に厚いと聞いていましたが、着任して接する方々の情けで改めて認識しました。そして、博多と云えば、博多子純情。のぼせもの男達の祭り、「博多祇園山笠」に吹く風は、殊に熱く、それでいて爽やかです。鎌倉時代の疫病封じに端を発し、

今に引き継がれ、毎年正月の寄り合いから始まって、本番の7月1日～15日は更にヒートアップ。1トンもの「昇き山」が20数名の「昇き手（男達）」により担がれ疾走する。特にラストフィナーレの15日早朝に繰り広げられる「追い山」は疾駆する男たちから溢れんばかりの熱気の風と、駆け去った後の朝の雑踏の風とのアンバランスの中で、徹夜で寝ぼけた頭がクリアになって行く自分が、妙に不思議に思えたのでした。

五十路を越えた私は、近くにある福岡城址の一角、大濠公園の池周り（1周2km）でミニマウンテンバイクを体力、気力維持のために走らせています。週に1度は1時間に11周、22kmをマラソンの一流ランナーの風を意識して疾走しています。土・日のひと時、私は目に映る草木や鳥に季節の移り変わりを感じ、ハンドルとペダルに集中して、脳裏を駆け巡る様々な事柄を一つ、また一つと取除きながら自分だけの風の中に身をおいて行くのです。疲労してゆく身体と萎えてゆく心に自問自答しながら、時々ベストの自分を探して、走り続けます。走行で汗ばんだ頬をつたう風は心地よく、終わった後の達成感と爽快感は明日へ向かう活力になっています。

私は人の営む所、何時も風が吹いていると思います。その風は、自然も時間も人も物も、何もかも、あらゆるものを含み、包み込んで絶え間なく吹いているのです。

「東風吹かば匂い起こせよ梅の花 主なしとて春なわすれそ」（詠人：菅原道真公）。

関東にある自宅の草木も、主人なくとも花や葉をつける準備は怠らなかつただろうか？

健やかに、たおやかに育っているだろうか？

皆々、つつがなく過ごしているのだろうか？

福岡の地は今日も、暖かな春の日差しのもと、穏やかな風が吹いているのです。



写真—1
大濠公園

—まゆづみ たけお
株式会社荏原倉ハイドロテック
九州支店 支店長—